

「有難うございました」

誌上を拝借して、喜びとともに、限らない感謝の気持ちを表させて頂きたいと思いません。受賞に際して、何か書くようにと編集部から書状を頂き、今さらながら思うことは、直接、間接に多くの方々から御世話になったということです。

受賞研究の寄稿によせて、動機などを、私事も入り恐縮と存じますが述べさせていただきます。私が大畑末吉氏訳のアンデルセンの「自伝」(河出書房)を知ったのは、戦後数年たった、まだ紙質も悪い頃でした。その本を何度読み返したことでしよう。今はポロポロになっていますが、アンデルセン蔵書の王座を占めています。特に彼が若き日にバストホルムから貰った手紙は、私に「生き方」をさえ示してくれました。

でも研究という姿勢で取り組んだのはさほど遠いことはありません。一年半ほど前から関西大学付属幼稚園教諭上原幸子、永見裕子姉と、月に一、二回よって岩波文

庫のアンデルセン童話集を一巻ずつ、幼児教育の問題と考え合わせながら検討してきました。そして幼児に紹介する場合は、再話の問題が、大きく浮び上ってきました

倉橋賞を受賞して

並 河 信 子

た。そんなある日、書店で浜田広介氏のアンデルセン作品の再話を見ると、親指姫にでてくる野ねずみが『じいさんねずみ』とあるのに目がとまりました。私はおぼ

さんと思い込んでいたのです。その日は店中にあるアンデルセン作品十冊位を求めて帰り、調べると、他の野ねずみはおばあさんかおばさんでした。更に驚いたことには英文にも *mouse* があつたことです。アンデルセンの作品の中でも、特に人口にかいしゃされている親指姫の中の重要人物である一匹の野ねずみが、男性であつたり女性であつたり、年令にも開きがあるのです。誰もが逢つたことのない空想の野ねずみ一匹から、興味が湧きに湧きました。やがてアンデルセンに関する図書、百数十冊が集まりました。それらを整理していく間に幼児の児童文学に関する多くの問題が、続出してきたといえましょう。

資料が多く、何かと未完成なままで学会にも発表し、恐縮しております。会長の山下俊郎先生が「これからも続けて下さい」と励まして下さいましたが、本当の検討はこれからではないかと思っております。

(大阪市立大学)